HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「学校の怪談」によるミステリの撹乱 ： 米澤穂信「やるべきことなら手短に」論
Author(s)	宮﨑, 遼河
Citation	国語国文研究, 164, 33-46
Issue Date	2025-03-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99417
Type	journal article
File Information	164_3.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「学校の怪談」によるミステリの撹乱
――米澤穂信「やるべきことなら手短に」論――

宮崎遼河

はじめに

やらなくてもいいことなら、やらない。
やらなければいけないことなら手短に。（九頁）

米澤穂信の短編「やるべきことなら手短に」の冒頭で記されるこの二文は、「古典部」シリーズ全体を通して掲げられる主人公・折木奉太郎の信条であり、かつ作中で彼を探偵役へと押し上げるアレゴリー的側面を示すマジックワードでもある。

米澤が手がける「古典部」シリーズは、『氷菓』（二〇〇一年、角川書店）以降、二〇一六年時点で全六巻（単行本および文庫版）が刊行されている。本作「やるべきことなら手短に」は、『野性時代』（二〇〇七年八月号）にて発表された後、シリーズ第四巻にあたる『遠まわりする雛』（二〇〇七年、角川書店）に収録された。

『氷菓』では、神山高校で衰退した状態にあった古典部に「一身上の都合」から入部を希望する千反田えるが、知らぬ間に部室に閉じ込められていたという謎をめぐり、その場に居合わせた折木が推理するところから物語が幕をあける。そして、古典部の復興（『氷菓』第二章「伝統ある古典部の再生」）を機に、折木は身辺に立ち現れる「謎」を解き明かす探偵の役回りを任されるようになる。本作は古典部が復興された直後の物語として描かれている。

また、本作は「日常の謎」に分類される作品である。「日常の謎」とは、「本格ミステリ」のサブジャンルの一つで、殺人事件などの犯罪や暴力沙汰がほとんど登場しないという特徴がある。諸岡卓真が説くように、「「日常の謎」は、リアリティの基準を「日常」に置いているために、ときに推理行為の必然性に乏しい謎を描いてしまう」ものであり、「「解く必要のない謎」という不自然さを抱え込むことによって成立するジャンル」である[1]。このように、「日常の謎」は本来解決される必然性のない生活空間に現れた謎をあえて表出させて

解き明かすスキームを持っている。

しかし、本作は、そうした「日常の謎」の枠組みを拡張し、探偵の役割を問い直すメタ・ミステリとしても捉えることができるのではないか。そうしたジャンルの拡張とロールの問い直しは、作中で怪談が語られる／騙られる行為に起因している。そして、本来探偵の立場から謎を究明するはずの折木が、怪談を利用して偽装した導線を作り上げ、千反田に偽りの真相を提示する。折木と千反田という怪談を語る／騙る側と聞き手の間には怪談の内容についての真偽の認識に明確な差異が生じる。さらに、そこには怪談が操作される「場」が学校であることも深く関わっている。「学校の怪談」は折木の日常を混乱させ、そこに怪異性・怪異空間を代入するのである。

本作で試みられている怪談の操作という行為は、「日常の謎」に限らず、本格ミステリというジャンル全体で見た場合でも特殊なものといえるだろう。前後するが、本稿における怪異性とは、怪談などによって形作られる虚構性を指す。特に妖怪や幽霊など、怪異の存在を、怪談などの聞き手側が受け入れた（在りそうだと認識した、合意した）状態を広く怪異性を帯びた「場」＝怪異空間が成立したものとして扱う。逆にいえば、怪異の存在を信じていなかったり、認識したりしていない状態は怪異空間とはなり得ない。本作でも——トリックによる操作ではあるが——折木や千反田が怪談の内容を架空のものから現実のものへと認識を転換させているように、彼らの日常空間は怪異空間へと接続されている。

このように、本作における「学校の怪談」の扱いを俯瞰することで、現代日本の本格ミステリで受容されてきた怪異にまつわる言説の一端を考察していきたい。加えて、その中で浮き彫りとなるのは、「日常の謎」の物語世界において「学校の怪談」が謎解きを撹乱する過程と、そこに自覚的に巻き込まれていく探偵像である。

一　「日常の謎」の系譜

はじめに、本稿で議論の中心となる「日常の謎」という本格ミステリから派生したサブジャンルについて、その書き手である米澤の位置を見極めたい。

日本国内のミステリシーンでは一九八七年以降、海外古典ミステリが基軸とした「謎—論理的解明」に重点を置く本格ミステリへと回帰する傾向が強まり、「新本格ミステリ」と呼称されるムーブメントが花開いた。この契機となったのは綾辻行人『十角館の殺人』（一九八七年、講談社）である。孤島で起こる連続殺人事件とその犯人を暴く探偵という構図は、アガサ・クリスティ『そして誰もいなくなった』（原著一九三九年）に代表されるような「クローズド・サークル」の様式を引き継ぐものであった。こうした様式のルネサンスは新たな書き手を呼び込みつつも、他方では和製ミステリの文脈に確かな変革をもたらしてもいた。

その一つとして、「日常の謎」派の作家たちの登場が挙げられよう。そして、その嚆矢となったのが北村薫『空飛ぶ馬』（一九八九年、東京創元社）だ。

『空飛ぶ馬』は、鮎川哲也が「鮎川哲也と十三の謎」と題して監修した、複数のミステリ作家による書き下ろし刊行企画の中の一作で

ある。語り手である女子大学生の「私」が、日常生活の中で見聞きした不可解な出来事を噺家・春桜亭円紫のもとへ持ち込み、円紫がそれを推理していくという形式で各話が進行する。ここで語られる日常の不可解な出来事とは、大学教授が幼い頃、知り得ないはずの古田織部をなぜ知っていたのか（「織部の霊」）や、ある女子高生がなぜ喫茶店で紅茶に際限なく砂糖を入れるのか（「砂糖合戦」）といったものである。

語り手などの身辺で見つけた謎を解明するという意味では、英米圏における「コージー・ミステリ」[2]との連関が窺える。「コージー・ミステリ」もまた探偵役となる者の周辺で起きた小規模な事件を、読者に向けて教養を提示しつつ解決していくサブジャンルの一つである。『空飛ぶ馬』の場合、一部犯罪性を含んだ話（「胡桃の中の鳥」）はあるものの、どの話にも殺人や大掛かりな物理トリックといったモチーフは登場せず、あくまでも生活の中に見出せる些細な疑問から物語が展開されていく。そのため、身近な殺人事件の捜査に探偵役が駆り出されることもなければ、大きな事件・犯罪に巻き込まれることもない。ただし、「日常の謎」においては、読者の知識の獲得などを目的にしている傾向はあまり見られない。そうした点で「日常の謎」は、「コージー・ミステリ」と隣接しつつも差異化されたサブジャンルといえるだろう。

北村のデビュー以降も若竹七海や光原百合、加納朋子ら、「日常の謎」派の書き手が陸続と登場し、一九九〇年代以降の日本の本格ミステリの中で「日常の謎」は一定の人気と地位が確立されていく。そして、二〇〇一年に『氷菓』で第五回角川学園小説大賞「ヤングミステリー&ホラー部門」で奨励賞を受賞し、デビューを果たした米澤もまたその系譜にある。

米澤の登場によって「日常の謎」は一層敷衍し、深化していくこととなる。「古典部」シリーズの他、『春期限定いちごタルト事件』（二〇〇四年、東京創元社）にはじまる「小市民」シリーズ、『本と鍵の季節』（二〇一八年、集英社）にはじまる「図書委員」シリーズなど、いずれのシリーズも概ね高校生たちが日常生活に潜む小さな事件を追い、意外な真相にたどり着くという構図で描かれている。これらの作品は、いわゆる「学園ミステリ」の手法の系譜にある。米澤が「全能感と裏返しの無能感、これを試練にかけることで自分を客観視することのできる視点を獲得する、そこまでの物語として〈古典部〉シリーズと〈小市民〉シリーズは考えています」[3]と語るように、探偵役に据えられた一介の高校生が抱く「全能感」と「無能感」を明滅させることで、新本格の潮流で再び描かれるようになった快刀乱麻に謎を解決する探偵像に一石を投じてみせたのである。実際に「古典部」シリーズの第二巻『愚者のエンドロール』（二〇〇二年、角川書店）には、折木の探偵としての全能感と、その推理の失敗が描かれている。[4]また反対に、『愚者のエンドロール』と同年に刊行された坂木司『青空の卵』（二〇〇二年、東京創元社）では、過去の出来事に囚われ、内的自己の確立に苦心するひきこもりの探偵が自身の探偵行為によって外界とのつながりを獲得し、再起していく様子が描かれている。生活至近に現れる謎の解決に関して、一方は探偵行為の苦悩を、もう一方は探偵行為の効用を問う実作が同年に発表されたという符合は、後述する現代日本の本格ミステリが抱

える構造的問題の趨勢とも決して無関係ではないだろう。

さらに、二〇〇〇年代（ゼロ年代）以降、相沢沙呼、似鳥鶏、青崎有吾らが登場し、「日常の謎」は、設定の上で特に「思春期の中高生」という属性との親和性を顕著に見せるようになった。ここでの詳述は避けるが、そうした背景には米澤のみならず、乙一『ＧＯＴＨリストカット事件』（二〇〇二年、角川書店）の影響もあったものと推測される。

このように、米澤作品の台頭は、「日常の謎」において、探偵自身の探偵行為に対する苦悩と、その必然性を問い直す端緒となり、そのサブジャンルとしての変動を加速させてきたことは疑いない。これはまさしく新本格で描かれてきた特権的な名探偵の文脈を脱臼させる過程であり、「日常の謎」が自律した文法を形成してきたことを意味する。

本稿で扱う「やるべきことなら手短に」は、『愚者のエンドロール』の後に発表された作品であり、前述のような米澤の経験値を糧に著されたものと考えられる。そこには探偵自身が探偵行為を遂行することへの躊躇と、「学校の怪談」を援用して謎自体を操作してしまうという二つの問題が浮上する。

後述するが、「日常の謎」においては「探偵―犯人」という対決の図式はほとんど見られない。なぜならこのジャンル内の日常の生活空間で発見される謎の多くは、殺人事件などの大事件の余波として現れるものではないからだ。それは文字通り、日常的な事象に関して副次的に生じる不自然さである。そして、このことは本作の構成にも通底している。その一方で、本作では本来であれば謎を検証するタームで、探偵によって「学校の怪談」が差し挟まれ、折木が千反田を偽の真相へと誘導する。では、そうした日常の中で探偵による怪談の語り／騙りによって歪曲してしまうものとは何か。次節より「学校の怪談」を取り込んだ本作の特性を明らかにしていく。

二　「学校の怪談」をめぐるミステリ

『遠まわりする雛』には、「やるべきことなら手短に」を筆頭に、全七編の短編が収められている。米澤は本短編集の刊行に際して、「冒頭の「学校の中だけの謎」から最後の「学校の外だけの謎」へと移行させていく」ように各話を配列したと語る。[5] また、文庫版「あとがき」において、本短編集は折木たち古典部員が「時間と和解」できるようになるまでの遍歴を描いたものと綴っている（四一〇頁）。確かに「やるべきことなら手短に」は『遠まわりする雛』に収められた作品の掲載順序では一番目にあたり、「学校の中だけの謎」が主題となっている。そして、この「学校の中だけの謎」をめぐって行われる折木の探偵行為は、彼と千反田との間にある距離感の遠さ（＝過ごした時間の短さ）を対象化する。さらに、本作ではそうした距離感が「学校の怪談」を介して表象されている。

それではここで一度本作の梗概を確認しておきたい。

神山高校入学から一ヶ月が経ったある日、折木は「入学一ヶ月の実感と今後の抱負」を書いた課題を自宅に忘れ、放課後の教室で二度目の課題作成に追われていた。そこに折木の中学時代からの同級生で、同じく古典部員の福部里志が現れ、「神山高校にもあった七不

思議、その二」「月光を奏でるピアノ」と題した怪談を折木に語り聞かせる。ある女生徒が夕方の特別棟の四階を訪れた際、音楽室からピアノソナタ「月光」が流れてくるのを耳にした。しかし、奏者に賛辞を伝えるために音楽室のドアを開けようとした折、音色が途切れてしまう。そして、彼女がドアを開けると、全身は力なく、長く乱れた髪を顔に垂らし、目を血走らせた女生徒がじっと見つめてきたという。

話を聞き終えた後も、折木は福部とともに教室に残って課題に取り組んでいた。そこにやって来た千反田は折木に対して「ピアノ」の怪談について尋ねようとするも、それに先んじて折木は自ら「神山高校にもあった七不思議、その一」「秘密倶楽部の勧誘メモ」の話題を振る。福部によると、神山高校には「女郎蜘蛛の会」と呼ばれる秘密倶楽部が存在し、無数の部活勧誘ポスターの中に紛れ込ませた一枚のメモでメンバーを集めているらしい。

折木は実際にそのメモを見つけようと千反田に話を持ちかけ、三人は校舎を捜索し始める。そして、折木が予想した通りにメモは勧誘ポスターの激戦区となっている一年生昇降口前の掲示板に貼られていた。

怪談を検証し終えた一向はその場で解散し、折木は課題を提出した後、福部とともに帰路に着く。そこで福部の協力のもと、折木が話題を操作して千反田に「ピアノ」の怪談を持ち出させないようにした経緯が明かされる。実は折木は、福部が「ピアノ」の怪談の発信源がA組であると語ったところから、その日、福部が千反田からその噂を仕入れたと推測し、彼女が自身のもとにやって来ることを予想していた。そして、折木は自作した勧誘メモを、千反田の死角を利用して野球部のポスターの下に隠れるように貼り付け、あたかも三人が訪れる前からそこに貼ってあったかのように偽装したのである。話題を操作した理由を、折木は教室から音楽室まで向かうのは遠いからと述べ、「やらなくてもいいことなら、やらない。／やらなければいけないことなら手短に。」のモットーを遂行したまでと述懐する。しかし、福部はこれを千反田だけでなく古典部という環境を受け入れるか否かという折木の現状に対する「保留」でしかないと一蹴する。そして、福部は音楽室まで行っていた方が真に折木のモットーにかなうことになったと言い残して物語が結ばれる。

本作における「学校の中だけの謎」とは、すなわち「学校の怪談」をめぐる探偵の動向である。より正確には探偵が怪談の内容を推理し、怪談が実在する事象であるということを証明する手続きが謎として表出するということだ。

怪談や民間伝承などをめぐる事件や謎を現実的な尺度で解明する過程を描いたミステリ的試行の実践は「やるべきことなら手短に」以前から存在している。しかし、本作に特異な点は「日常の謎」の回路に「学校の怪談」を持ち込み、結果として謎を深遠へと向かわせる手法をとっているところにある。どういうことか。本作では大きく二つの怪談が語られる。一つは最初に福部が校内で収集した怪談をナンバリングした「神山高校にもあった七不思議、その二」の「月光を奏でるピアノ」。もう一つは物語の中核を成す「その一」にあたる「秘密倶楽部の勧誘メモ」である。そして、折木は千反田による「ピアノ」の怪談の謎解き依頼を封殺し、「女郎蜘蛛の会」の勧

誘メモがどこにあるかを推理してみせる。注目したいのは、ここで折木は怪談が虚構であると推理しているのでなく、怪談の内容が現実と紐づけられた真実であることを推理した点にある。物語終盤で折木が「ピアノ」の怪談について、A組の生徒が耳にしたのは目覚まし用に設定されたアラームの「月光」、目撃したのは寝起き直後の女生徒であると推理していることからも分かるように、一般にミステリにおける怪談の推理はその内容が偽＝非怪異現象であることを証明するために行われる。このことは本作と同じく『遠まわりする雛』に収められた「正体見たり」に関しても同様の指摘ができる。「正体見たり」では、古典部員たちが温泉合宿で訪れた民宿で「首吊りの影」を目撃し、その正体をめぐって折木は千反田に推理を披露する。厳密には作中で語られ／騙られ、究明されるのは幽霊譚であるが、ここでも折木は「首吊りの影、あれな……。ハンガーにかかった浴衣、だったんだろうな」（一三九頁）と幽霊譚を日常的な要素に還元して見せる。本節冒頭で示したように、『遠まわりする雛』の収録作は掲載順序に従って時系列が進み、古典部員たちが「時間と和解」していく構図となっている。「正体見たり」の掲載順序は三番目で、物語の時系列は本作と同年の八月である。したがって折木と千反田、その他古典部員間の親密度は入学一ヶ月後よりも深くなっているのは自明だろう。間に別巻収録の物語が複数展開されており、その過程で折木は自身が千反田の求めに応じて推理することを拒まなくなっていく。しかし、本作で折木は環境の変化を「保留」するがゆえに「女郎蜘蛛の会」の怪談を利用して千反田の疑問を煙に巻くのである。福部から折木に伝達された段階では存在が真偽不明の「女郎蜘蛛の会」は、その推理と証明によって強引に真とされてしまう。さらに、千反田においては、本来折木に尋ねようとしていた「ピアノ」の怪談の謎が「保留」されたままとなる。

ところで、ここで再び疑問として浮上するのは折木による怪談の操作はなぜ成功してしまったのかという点である。見逃してはならないのは本作に登場する怪談はいずれも生徒間を媒介する「学校の怪談」であると同時に、「噂話」あるいは「デマ（デマゴギー）」の性質を持っているということだ。つまり、米澤が述べるところの「学校の中だけの謎」である。また、このことを踏まえると、学校空間という「場」の影響も併せて検討する必要があるだろう。

「学校の怪談」というテクストは最初に語られた／騙られた瞬間から情報が散逸し、恒常的に形態を変化させるようになる。本作における「学校の怪談」の重要性は、「右も左もわからない新環境で、哀れな子羊よろしく右往左往していた僕ら一年生、三百二十人。入学後二週間ちょっとで、『この学校には、実はね』とお話ができるようになった。なんともめざましい成長じゃないか」（一五～一六頁）という福部の発言に集約されている。ここで福部は生徒間で怪談が語られるようになったという事実そのものに興味を示しているが、それは新たな環境における「成長」、つまりは「時間と和解」しつつあるか否かというスケールが「学校の怪談」による折木たち古典部員のコミュニケーションにも援用できるということでもある。

こうした「学校の怪談」を変容しつつ伝播していくデマの一形式とする中村希明は、デマの生成過程を、「たいていのデマは事件の目撃談から始まっているが、同じシーンを見ても状況の解釈は目撃者

のパーソナリティによってさまざまである。またその知覚内容も時間がたつにつれ記憶の段階で変容し、それが人から人へ報告される伝達の段階という、以上の三過程〔事件の目撃、記憶の変容、伝達の段階―引用者注〕のすべてで歪曲される[6]」と説く。そして、「「現実基準」を満足する生々とした特殊な細目を付加することで、デマはその真実味をましていっそう流布する理屈になる[7]」という。

また、常光徹は、学校空間で生徒たちによって拡散される「妖怪騒ぎ」の例から、「何らかの火種をもとに煽り立てる媒介者がいなければうわさは力を持たない[8]」とし、そこには噂話を増幅して加速させるような「トリックスター的存在」の生徒がいると指摘する。

これらの言を踏まえると、「学校の怪談」は学校空間という「場」で構築されるからこそ非現実的な怪異を呼び込む基層として機能することが分かる。本作の場合、物語世界内での現実のレベルと虚構のレベルを侵犯する鍵となるのは、折木によって操作された怪談である。そして、福部が「トリックスター的存在」の生徒として折木の推理に加担することによって、千反田に「女郎蜘蛛の会」の存在を肯定させるのだ。福部から折木、千反田へと怪談が伝達するに従って、「女郎蜘蛛の会」の謎から本来的な存在の曖昧さが剥奪され、実体を持ち得るものへと変容していく。本作では折木の推理の内容通りに勧誘メモが発見されることで学校空間と怪談の世界（「女郎蜘蛛の会」）がリンクする。そうして怪談は現実性を獲得し、折木から千反田へのデマの伝達が完了するのである。

また、この怪談の操作は、学校で発生した秘密倶楽部に関する物語であったからこそ成功したともいえる。それは、本作の舞台となる神山高校が「アカペラ部だの奇術部だので五十を超える部活動が存在し、秋になれば三日間にわたって文化祭を開く」（二九～三〇頁）ような部活動の盛んな学校であるためだ。無論、その中には活動実態のわからない部活もあるだろう。そうした場所であるからこそ、「女郎蜘蛛の会」のような秘密倶楽部が紛れ込む余地があり、千反田も勧誘メモの発見に違和感を持たない。

まとめると、本作で語られる／騙られる怪談が「学校の中だけの謎」であることで、「女郎蜘蛛の会」の怪談の操作と「保留」という折木の二つの企みが達成されるのである。

後節で詳しく触れるが、怪異と出逢った少年少女たちによる対話劇を描いた西尾維新による「〈物語〉」シリーズの間話として発表された「こよみティー」（『暦物語』二〇一三年、講談社）もまた「学校の怪談」を軸にした「日常の謎」に位置付けられる作品である。本シリーズでは、基本的に主人公の高校生・阿良々木暦の他、日常生活の中に怪異が存在することを前提とする一部の者たちが中心となって物語が語られる。そのため、「こよみティー」においても探偵役となる神原駿河は怪談の現実性を前提とし、本作同様に信じられるための怪談として補完することで推理を完成させる。

以上のように、本作より後年の作品では「学校の怪談」あるいは怪談の特性の基本形を援用した本格ミステリも散見される。その点で本作は「学校の怪談」を「日常の謎」へと持ち込み、その回路を意図的に攪乱することに成功した早期の例であるといえる。

三　転倒する「日常の謎」

笠井潔は北村の『空飛ぶ馬』を例として「大袈裟な探偵小説的道具立てを排除し、日常的リアリティに徹しようとすればするほど、北村作品はメルヘンの虚構世界に無限接近していく」[9]と評価する。そして、この「メルヘンの虚構世界」とは、諸岡が『空飛ぶ馬』所収の「赤頭巾」を挙げて説明しているように、「円紫の推理が必ずしも事実に根拠付けられているわけでは」なく、「具体的な事実の裏付けを欠いたまま赤の他人のプライバシーを推測（邪推）」しているこの裏返しである。[10]これは前節で確認したように折木による怪談の操作が自ら虚構へと接近していくことで、怪談の実在性が補強され、結果的にその虚構性が千反田の認識から捨象されてしまうことと重なる。

そもそもミステリ作品において探偵役による推理は、危機的状況の打破とその収束を目的に行われるものが一般的だ。そのため、殺人等の犯罪事件が発生しない状況ではそうした探偵行為は有効に機能しているとは言い難い。しかし、「日常の謎」に分類される作品に登場するような探偵役は、犯罪や暴力といった大きな事件性を内包しないような、あくまでも彼らの生活と地続きの位置にある謎を解き明かす。それはあえて日常の生活空間から謎を析出し、喝破することに他ならない。そして、この一方通行の探偵行為は特に学校空間という「場」で顕著となる。

諸岡によると、「日常の謎」の方法がその初期から内在していた「歪み」が、学校が舞台に選ばれることによって浮上しやすくなり、いっそう「こじれる」ようになった[11]という。これは特に中学校や高校という生活共同体の内部で、ある生徒が別の生徒を糾弾したり、あえて秘密にされていた内容を暴露したりするために生じる軋轢で、「日常の謎」のみならず「学園ミステリ」全般が長らく胚胎してきた「いじめ」問題などとも関連している。

しかし、「やるべきことなら手短に」では探偵である折木が何かを暴くこともなければ誰かを糾弾することもない。『空飛ぶ馬』と同じく「大袈裟な探偵小説的道具立て」は排除されている。本作において謎として提示されるのは、折木の犯行の手口と「保留」する理由である。米澤が描く探偵たちの苦悩と成長には「全能感」と「無能感」の交錯が用いられていることについては既に述べたが、後者の「保留」の謎に関してはこれら二つの感情の乱高下の作用で生み出されたものといってよいだろう。また、謎解きゲームの側面から本作を考えると、探偵がなぜ犯行に及んだのか（Whydunit）を探偵自身と読者が並行して推理する構成になっている。したがって、本作には折木の自己言及的な謎があるのみで、俯瞰すると、その推理に関しては探偵が日常の「場」に亀裂を入れるようなものではない。

他方、怪談の操作＝「操り」からは現代本格ミステリにおけるアポリアが垣間見える。探偵による偽の手がかりと推理を描いていることから、本作は「後期クイーン的問題」[12]を意図的に内在化させた実作としても考えられる。

「後期クイーン的問題」で主題となるのは、真犯人が偽の手がかりを配置することで生じる真相究明の不可能性だ。

折木は怪談の実在を証明するために偽の手がかりとして勧誘メモを示す。海老原豊は、本作における偽の手がかり問題の抑制は「福部の「保留」という言葉が端的に示しているように、日常＝中間共同体へのコミットをすることを通じて」試みられていると述べる。[13]「後期クイーン的問題」の解決はできなくとも抑制はできているとする海老原の指摘は確かに的を射たものであろう。しかしながら、そうした抑制の構図を提示するだけでは本作の特異性を回収し切れていない。なぜなら問題点はその延長線上に位置しているからだ。そしてその問題とは、「操り」の不完全性が前景化しているということである。

本作の謎は初めから探偵の中にしか置かれておらず、最終的に福部によって「保留」という言葉が与えられるまで折木自身も謎の正体を掴みきれていない。「ピアノ」の怪談を「女郎蜘蛛の会」の怪談で迎え撃ち、探偵による「操り」が演じられているにもかかわらず、折木は「操り」の目的（Whydunit）を不完全な形でしか捉えられていないのである。その意味で本作では「日常の謎」の文法と「後期クイーン的問題」の形式が同時に更新されている。付け加えると、ある怪談を別の怪談で上書きする行為は、城平京『虚構推理』（二〇一一年、講談社）で描かれた、「ネットロア」[14]の書き換えによって事件の中心に座す怪異を消滅させる探偵行為に通じるものがある。

ここまで見てきたように、本作にはガジェットとして扱われる「学校の怪談」が描かれている。そして、そこには複数の問題を抱え込みながら、探偵によって怪談が語られる／騙られることで転倒した「日常の謎」の姿が窺えよう。

四　非日常と怪談

最後に、「日常の謎」に取り込まれた怪談と、その作用が現代本格ミステリにもたらした功罪について検討していきたい。

怪談は日常を非日常へと接続し、本格ミステリの物語に内包された謎を曖昧化させてしまう。そこでは怪談を語る／騙る者とそれを聞く者たちは「非日常の中の日常」へと無抵抗に巻き込まれることとなる。そして、繰り返しになるが、「やるべきことなら手短に」のように、閉鎖的な共同体の中で語られる／騙られる「学校の怪談」はその他の怪談と性質を異にする。

口承文芸の側面から、「学校の怪談」が持つ再現性を一柳は以下のように評価している。

> 学校に通う子どもたちにとっては一回的・直線的な時間が流れる場であっても、学校自体は同じふるまいを繰り返している、循環的な時間が流れている場といえるだろう。学校の内部にあっては、過去に起きた出来事・事件は何度も現前する。〔中略〕特定の場に結集した物語は、その物語を再生するにふさわしい語り部に出会うことで、何度もよみがえるのだ。[15]

「女郎蜘蛛の会」の活動実態は一切不明だ。そもそも「女郎蜘蛛の会」の怪談の出所自体、福部が所属する総務委員に伝わる以前にどこで語られていたのかもわからない。しかし、一度福部から折木に

伝わった怪談は、勧誘メモを偽装することで再現される。さらに、部活動のポスターが集中する掲示板が学校空間の「循環的な時間」をリプレイする「場」となり、秘密倶楽部の存在可能性を強調する。

また、「学校の怪談」には時間をリプレイするという性質の他に、事物をシミュレーションする性質があると考えられる。例えば、福嶋亮大は、米澤の『夏期限定トロピカルパフェ事件』（二〇〇六年、東京創元社）に登場する「地図」を人間の成長のシミュレータと位置付けた[16]。さらに、その中で西尾の「〈物語〉」シリーズにおける怪異なども語り手の内的変化を示す例としつつ、米澤と西尾を並置して「現代の小説は大なり小なりだまし絵的な性質を帯びている」[17]と指摘する。こうしたところからシミュレータとしての「学校の怪談」が見えてくるのではないだろうか。

では、この福島の論考を元に、先に挙げた西尾の「こよみティー」における「学校の怪談」とそれを利用した推理を確認したい。

主人公の暦は、中学生の妹・月火から、彼女が所属している茶道部で本来いるはずのない「八人目」の部員が存在したという怪談が広まっており、どれだけ論理的に否定しても噂がなくならないと相談を受ける。翌日、暦がこの話を後輩の神原に聞かせたところ、神原は、月火を騙すような形にはなるが解決策はあると語る。その後、暦は神原のアドバイスを元に、他の六人の部員たちは月火が常習的に部室のお茶やお菓子を勝手に持ち出していることを庇い、カムフラージュするためにあえて「八人目」を仕立て上げて噂を流していると話し、彼女の説得に成功する。

解決編では神原が怪談を操作し、「みんなは月火のために『八人目』を信じているのだ」[18]という推理を、暦を媒介して月火に披露したことが明かされる。それに対し、月火は「よし、ここは騙されてあげよう！」[19]とこの推理にあえて騙されることを選択するのである。そして、暦から事の顛末を聞いた神原は「茶道部員たちと阿良々木先輩。月火ちゃんは、どっちに騙されてくれたんだろうな？」[20]と示唆的な発言を残す。つまり、月火にとって「八人目」の怪談を肯定することは、そのまま暦と彼の語り／騙りを肯定することを意味しているといえよう。そこでは兄である暦に対する月火の信頼度のシミュレータとして「八人目」の怪談が用いられている。

それでは、こうした事例を踏まえて「やるべきことなら手短に」で描かれている怪談が非日常を析出する過程を整理していく。本作における非日常とは、「女郎蜘蛛の会」の怪談および折木と千反田の間の距離感が二重写しになったところに現れる。

折木は「保留」するために怪談を推理し、「操り」を遂行した。福部が「『不思議ヲ以テ不思議ヲ制ス』の計、お見事だったよ」（四八頁）と揶揄するように、千反田も怪談の証明に納得し、折木のモットーは保たれたように思われる。だが、帰路で折木は福部に行動の真意を問われることで初めて内幕を見つめるようになる。

里志は言う。

「ただ、何をしたかったのかはわかっても、どうしてそんなことをしたのかわからない。『月光を奏でるピアノ』の話をする代わりに『女郎蜘蛛の会』の話をして、いったいホータローは何をしたかったのかな？　まさか、ピアノの謎には歯が立たない

から避けたかった、なんて言わないよね」

もちろん違う。

そして俺は、何かをしたかったのではない。……したくなかったのだ。（五〇頁）

折木は「操り」を実行したことに自覚的である反面、その明確な理由をあえて伏せたままにする。漠然と「何か」を「したくなかった」がために探偵としての振る舞いを「手短に」済ませてしまうのである。この時、「女郎蜘蛛の会」の怪談とその証明は、折木＝語り手のシミュレータとして捉え返され、本作時点での千反田や古典部との距離を照射する。

どうして俺は、疑問を疑問で封じようなどと思ったのか。確かにそれは、音楽室まで行くよりはマシにしても、手間がかかる方法であることに間違いない。なぜ俺は、そんなことをしたのだろう？

言い方に棘を感じないことはないが、里志の言っていることは正しいと認めざるを得ない。千反田の襲来を本気で疎んじるなら、「知らんよ」の一言で済んだことではないか。

〔中略〕

「ホータローは、千反田さんがいる古典部に所属しているという状況に、まだぜんぜん慣れてない。だからだ。だから、まわりくどい手を使おうとする。ホータローは今日、千反田さんを拒絶したつもりかもしれない。でもね、僕に言わせれば、あれは拒絶なんかじゃない」（五四～五五頁）

福部から一連の「操り」を「保留」とまとめられた折木は「保留の先に何があるのかぐらい、俺にもわかる。」（五六頁）と語る。そして、「その先」にある「何」かは、千反田が見つけ出した謎を解き続ける探偵や古典部員として活動することを受け入れた、折木にとっての新たな日常生活であろう。それゆえに、彼は選択を躊躇い、「保留」状態にするために怪談を推理したのだ。しかし、怪談を利用した「操り」は彼を否応なく謎を解き続ける「非日常の中の日常」へと突入させてしまう。

「音楽室まで足を延ばしていたほうが、長い目で見れば、ホータローのモットーにかなうことになったんじゃないかと思うよ。今日の屈託は、意外と、高くつくかもしれない。今日のこと、僕は貸しにする気はない。でも千反田さんはどうかな？じゃ、僕はここで。また明日」（五七頁）

福部は、本作においては探偵の「操り」を全て俯瞰して把握できる人物である。「学校の怪談」の謎を顕在化させてしまう折木の行為に対して、「トリックスター的存在」である福部の立ち回りは無視できない。果たして、福部が折木に加担し、千反田を偽の真相に誘導する動機は「不思議を不思議で迎え撃つ。うん、僕好みだ。いい変化球だよ」（五四頁）という説明だけでは成立していないように思われる。変化していく学校空間における日常で自身の「モットー」

と「エクスキューズ」を混同する折木に、福部は「根本的な誤謬」を示す。折木は、千反田の疑問を晴らすことを「やるべきこと」と分かっていながら、無自覚に「やらなくてもいいこと」と見做して偽の推理を行った。福部が迂遠な方法ながらその誤謬を折木に突きつけたのは、折木に探偵としての能力と、それを利己的に運用することの危うさを自覚させるためであったとも考えられよう。本作において、折木の中学からの同級生であり彼の友人という立場にある福部の屈折した行動からは、折木という探偵役を探偵する「もう一人の探偵役」の姿が見えてくる。

したがって、福部が折木の真意をすでに見抜いているからこそ完遂されたかに思われた「操り」は不完全な形で成立する。しかし、これとは別に、折木の「屈託」は「高くつく」のである。どのような形であれ、彼は怪談を溶媒にして非日常の存在を確かなものにしてしまったのだ。

こうして折木の高校生活は「手短に」は済ませられない迂遠な進路をたどっていく。

おわりに

本作で描かれた事象を端的にまとめてしまえば、環境の変化を受け入れられない折木が、理屈をこじつけて千反田を遠ざけた、となる。だが、見かけ上は解消された千反田の疑問も折木の抵抗も、「学校の怪談」を経由したことで「屈託」となって折木を懊悩させるに至る。そして、本作の怪談は『遠まわりする雛』全体でも彼らの遠さの尺度として残り続け、特に第三章「正体見たり」で折木が千反田の疑問視する怪談と学校の外側で対峙した時、それは再び読者のもとに差し戻され、折木と千反田、そして古典部が「時間と和解」したことが示される。だからこそ、怪談の苦々しい真相を知っても「千反田はもう何も言わず、ただうつむいて」（一四三頁）折木の後をついていくのだ。また、その時間が表象するのは、折木にとっての探偵行為が「やらなくてもいいこと」から「手短に」でも千反田のために「やるべきこと」へと昇華したことでもある。「古典部」シリーズでは本作以降も、探偵、あるいは高校生としての「無力感」が描かれ続ける。そのような「無力感」と折木が正面から向き合うことで『愚者のエンドロール』で経験する屈折した推理の失敗から立ち直っていく。本作はそうした意味でも『愚者のエンドロール』以前の折木の「全能感」が副題として設定されているのではないだろうか。

本作の他にも近年は「こよみティー」のような言説としての怪談を取り入れた実験的なミステリ諸作が発表され続けている。そして、そうした実作で描かれる謎に満ちた非日常は日常生活から断絶されたものでなく、地続きになっているという点に注目したい。

ここまで議論してきたように、確かに本作は「日常の謎」と「学校の怪談」を接続させた実作であった。ただし、本作の評価はそうした説明に収まるものではない。ここでの米澤の仕事は、探偵が「学校の怪談」を操作し、持ち込まれた謎を「保留」状態にする過程を描いたことで、探偵による「操り」の問題を新たな形で可視化したところにある。さらに、シリーズ全体での課題でもある探偵の内的

な葛藤とそこからの脱出は、本作が基盤となって描かれていくことになる。もとより本格ミステリにおいて名探偵は全能であり、そこに成長は不要とされてきた。しかし、本作は青春小説を土台としつつ本格ミステリの方法で組み立てられているためにそれが達成されているのだ。したがって、本作は探偵の成長を描いた青春ミステリとしての側面も備えた短編作品として評価できる。

「日常の謎」の一つの特異点は、ミステリの構造に「学校の怪談」を効果的に導入した本作にこそ存在している。

附記

引用文中の傍点は原文のままとし、ルビは適宜省略、改行は「／」で示した。また、「やるべきことなら手短に」および「正体見たり」の本文引用は全て角川文庫版『遠まわりする雛』（二〇一〇年）に拠った。

注

1 諸岡卓真「「日常の謎」をこじらせる――相沢沙呼『午前零時のサンドリヨン』論」（押野武志・谷口基・横濱雄二・諸岡卓真編著『日本探偵小説を知る――一五〇年の愉楽』二〇一八年、北海道大学出版会、二二九頁）。

2 大橋崇行は「「探偵」や「刑事」ではない作中人物が謎を解決する、それが主人公のごく狭い範囲のなかで行われる、また、事件を解決する過程で料理のレシピなどをはじめ、女性が興味を持ちそうな蘊蓄が挟み込まれているなど、「コージー・ミステリ」には少なからず様式化された特徴」があるとして、その傾向をまとめている（大橋崇行「ジャンルの変容と「コージー・ミステリ」の位置――ライト文芸から見た現代の小説と批評」〔西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える――批評・小説・ポップカルチャーをめぐって』二〇一七年、ひつじ書房〕、三〇二頁）。

3 米澤穂信・笠井潔「ミステリという方舟の向かう先――「第四の波」を待ちながら」（『ユリイカ』二〇〇七年、第三九巻第四号、青土社、八五頁）。

4 『愚者のエンドロール』の折木の推理における誤謬の体系的な分析については、海老原豊「終わりなき「日常の謎」――米澤穂信の空気を読む推理的ゾンビ」（限界研編『21世紀探偵小説――ポスト新本格と論理の崩壊』二〇一二年、南雲堂）に詳しい。

5 米澤穂信『米澤穂信と古典部』（二〇一七年、角川書店、五一頁）。

6 中村希明『怪談の心理学――学校に生まれる怖い話』（一九九四年、講談社現代新書、四三頁）。

7 6に同じ（六三頁）。

8 常光徹『学校の怪談――口承文芸の展開と諸相――』（〈新版〉二〇一三年、ミネルヴァ書房、五九頁）。

9 笠井潔『探偵小説論Ⅱ　虚空の螺旋』（一九九八年、東京創元社、二一五頁）。

10 諸岡卓真「「日常の謎」と隠密――瀬川コウ『謎好き乙女と奪

われた青春』論」（『層――映像と表現』二〇一六年、Ｖｏｌ．９、北海道大学大学院文学研究科　映像・表現文化論講座、一三七頁）。

11　1に同じ（一三三頁）。

12　論理学で考えられる「ゲーデル問題」を元に法月綸太郎が著した「初期クイーン論」（『現代思想』一九九五年、第二三巻第二号、青土社）により広まった現代本格ミステリが抱える形式上の諸問題。特に犯人が用意した偽の証拠を探偵が参照してしまうことで真相に到達できなくなるという「操り」が中心となっている。

13　海老原豊「終わりなき「日常の謎」――米澤穂信の空気を読む推理的ゾンビ」（限界研編『21世紀探偵小説――ポスト新本格と論理の崩壊』二〇一二年、南雲堂、三〇六頁）。

14　「インターネット」と「フォークロア」の合成語。インターネット上で語られる怪談に対しても用いられている。ネットロアと怪異のつながりについては、口承文芸の側面から検討している古山美佳「創作された怪異譚――ネットロア前夜」（『早稲田文学』〔第一〇次〕二〇二一年、第二六号、早稲田文学会）に詳しい。

15　一柳廣孝「はじめに――「学校の怪談」という問題系」（一柳廣孝編著『「学校の怪談」はささやく』二〇〇五年、青弓社、一二～一三頁）。

16　福嶋亮大「シミュレーションをめぐる五つの断章」（『ユリイカ』二〇〇七年、第三九巻第四号、青土社）参照。

17　16に同じ（一九八～一九九頁）。

18　西尾維新「こよみティー」（『暦物語』二〇一三年、講談社、二七四頁）。

19　18に同じ（二七五頁）。

20　18に同じ（二七五頁）。

（みやざき　りょうが・北海道大学大学院博士後期課程）